資料

インタビューを書く

川浦康至

はじめに

インタビューの後には文字起こしが待っている。かつて「テープ起こし」と呼ばれた作業だ。多くの人にとって、インタビューは楽しくても、文字起こしとなると勝手が違うらしい。以下は、立花隆ゼミでインタビュー実習に参加した学生たちの会話である（『二十歳のころ Ⅰ』の「立花ゼミ卒業生座談会」から）。

平尾　しかし、原稿を書く段になると腰が重くなって困りました。

中村　話を聞くのは楽しいんだけれども。

林　僕も、取材に行った後テープ起こしして原稿を書くのが少し億劫でした。

平尾　立花さんが以前に、「取材だけ行って、原稿書かずに済んだらどんなにいいか」って言ってたことがある。本当にそういう気持ち。

しかし、わたし自身、インタビューでは原稿を書く作業が一番楽しいので、立花隆の「原稿書かずに済んだらどんなにいいか」という発言にも、学生たちの会話にも驚かされた。かつてゼミでインタビュー課題を出した際、文字起こしの話をしたらインタビュー時間を早めに切り上げようとする学生がでてきた。少しでも楽をしたいと思ったのだろうか。仕方がないので、そのときは最低でも二〇分はやるよう指示した。

学生にとっては億劫な、わたしにとっては楽しい、インタビュー稿の作成にまでふれたインタビュー法の指南書はなぜかほとんど見かけない。それらの大半は、インタビューの設計と実施に関することがらで占められている。そのことも彼らを億劫にさせているのかもしれない。どう書けばいいのか。それがわかるだけでも気が楽になるのではないだろうか。そう考え、本稿を書き進めた。いわばインタビュー法の教材である。

文字起こし稿とインタビュー稿

インタビュー記録は文字起こし稿とインタビュー稿とに分かれる。前者は文字起こしをベースとした記録、いわゆるトランスクリプトであり、後者はそれを元に構成された、読まれるための原稿である。

文字起こし稿は、その後の作業の基礎になるため、うまく聞き取れなかった箇所はインタビュイーに確認するようにしよう。また最終原稿はチェックしてもらうことをインタビュー前に説明したうえで、申し出があれば、この段階でも確認してもらおう。言い間違いや勘違い、修正・削除したい箇所があるかもしれない。反対に、インタビュー時には思いつかなかったけれども、あとから思い出したり、気づいたりして追加したいことがあるかもしれない。それらをインタビュイーに修正してもらう。もし本人が削除を要望した箇所で、記録として残したい場合には、その理由を説明するか、代替案を提案することもあろう。残すことによる記録価値とプライバシー保護を両立させるためである。こうした一連のやりとりを通じて、インタビュイーもインタビュアーも相互に納得のいく記録に近づける（原稿作成にあたって、音声認識ソフトが使えるかもしれない）。

文字起こし稿とて、実際のインタビューそのものではない。発話を文字にする方法は何通りもある。例えば、ひらがなで書くか漢字で書くか。テープ起こしの巧者、津野海太郎は『おかしな時代』で、「私のばあい、テープ起こしでは、ひらがなを中心として漢字を補助的につかう。すなわち『漢字仮名混じり文』ならぬ『かな漢字まじり文』である。そうでないと、話しことばをいきいきと文字化することができない」と書く。

表記レベルからして、すでに文字起こし稿は実在しないインタビューの記録である。文字起こし稿はインタビューの忠実な再生物ではないし、仮にそうしたいと思っても不可能である。

インタビュー稿は読まれるための記録であり、こうなるともはや作品に近い。インタビュー稿の理想は、あたかも目の前にインタビュイーがいるかのように読者が感じてくれることである。インタビュアーは、いわば読者とインタビュイーとを取り結ぶ仲介役をになう。それは文字起こし稿のままでは実現できない。インタビュー場面から話しことばを抜き取っただけの記録だからである。当然ながら、読者はインタビュイーについてはもちろん当該テーマについてもインタビュアーほどの知識を持ち合わせていない。インタビュー稿はそれを前提に作る必要がある。いったん完成したインタビュー稿は書き手の元を離れ、すべて読者に委ねられる。

インタビュー稿の作成

インタビュー稿は大きく、以下の三タイプに分かれる。会話型、問わず語り型、「図と地」型である（表1）。

会話型（Conversational format）はインタビューの発言とイ

表１　インタビュー稿のタイプ

タイプ	特徴	再構成度	書きやすさ	適用例
会話型	質問と回答の対で書かれる	低い	高い	インタビュー記事
問わず語り型	独白調で書かれる	中ぐらい	中ぐらい	口述史
「図と地」型	回答が地の文に組み込まれる	高い	低い	取材記事

ンタビュイーの発言がセットになったインタビュー稿で、新聞記事や雑誌記事でよく見かけるタイプである。形式としては質問と回答の対になっていて、インタビュー場面そのもののように見えるが、インタビューそのものではない。実際、声に出してみれば、すぐに気づくはずである。たとえば、こんなふうに理路整然と話せるわけがない、あるいは話し言葉ではないと感じるに違いない。しかし、不思議なことに読んでいて違和感はない。

会話型はさらに次の二種類に分かれる。Q&A型（Question-and-answer format）と対話型（Dialogue format）である。前者は、多くの場合、質問は整理して書かれ、回答は複数の質問に対する各回答の合成物として書かれる。また、実際のインタビューで関連発言が別の箇所で出て来た場合、元の発言に含めて書かれることもある。会話だからと言って、必ずしも時系列にこだわらなくてもよい。

対談に近いインタビューでは、インタビュアーの発言にもそれなりの分量が割かれる。ただし字数レベルでインタビュアーがインタビュイーを上回ると、どちらがどちらなのかわからなくなるため、実際のインタビュー場面はともかく、インタビュー稿ではインタビュアーの発言文字数は抑えるようにしたほうがよい。

回答を見れば、どんな質問がなされたのかおおよそ見当がつく。このしくみを利用すれば、インタビュー稿に質問を含めるまでもない。こうした発想で書かれたインタビュー稿が問わず語り型（Narrative format）である。回答が「私の名前は父が付けました」で始まれば、読者は命名者について尋ねられたと思うだろう。回答の冒頭に「命名者ですか？」と念を押すような一言があれば、なされた質問がより明確になる。問わず語り型は、読者からすると、常にインタビュイーの視点で語られるため、読みやすい。

最後のタイプが、インタビュイーの話を「図」として組み込み（際立たせ）、話の要約や背景、分析を「地」として加える「図と地」型（Figure-and-ground format）である。「図と地」型はほかの二タイプにくらべ、インタビュアーの視点が明確で、そのぶんインタビューの再構成度も高い。

インタビュー稿は、出来上がったら必ずインタビュイーにチェックしてもらう。文字起こし稿は適宜、本人に見てもらえばよいが、インタビュー稿は人の目にふれるものであり、正確を期すと同時に、プライバシーを保障するためでもある。インタビューはインタビュイーとの共同制作物であり、インタビューを受けてよかったと思ってもらえるような後味の良いインタビュー稿に仕上げるのが望ましい。

実際のインタビュー稿では上記三タイプの混合もありうるだろう。また、どのタイプにするかは、インタビューのテーマや展開、雰囲気、インタビュイーの特徴、インタビュアーの好み、文字数の制約から決めればよい。また一次記録を経ないで直接、二次記録つまりインタビュー稿を作成する場合もあろう。インタビュー稿は新聞や雑誌、書籍、ネットと媒体を問わず、よく見かける。それらを普段から読むようにして、センスを磨くことも作成スキルの向上に欠かせない。

インタビュー稿の実際

二〇一七年、「暮しの手帖」編集部が「戦中・戦後の暮しの記録」を募集した。

「『戦中・戦後の暮しの記録』を募ります。当時、日本でお暮しの方で、戦争の影響を受けなかった人はひとりもいないはずです。その日々のことをお話しくださいませんか?」

その呼びかけの一環として「〝聞き書き〟のすすめ」と題する記事が同誌の第四世紀八八号（二〇一七年六・七月号）に掲載された。その中に原稿見本が紹介されている。見本は同一インタビューが二通りの書き方で示され、インタビュー稿のいい見本にもなっている。一つが問わず語り型、もう一つが「図と地」型である。

以下に、それらを引用するとともに、その見本からわたしが再現した会話型を紹介する。同じインタビューにおける三通りの違いを経験してほしい。

タイトルは「満州で生まれて」。聞き手は編集部、話し手は「上野由保子さん（女性八三歳、一九三三年七月十三日、満州生まれ。家族は父、母、七人きょうだいで、上から五番目）」である。

会話型

―珍しいお名前ですね。

父の話では「由保子（ゆほこ）」という名前は「help by God」=「神によって保たれる子」という意味だそうですよ。両親がクリスチャンだったんです。

―満州にはどんな事情で渡られたのでしょうか。

父の仕事の都合です。私が生まれたのはいまの北朝鮮と中国との境にある安東（あんとう）という街で、国境を鴨緑江（おうりょくこう）という大きな河が流れていました。そこの開発事業で母と来たそうです。満州では、わたしを含め7人の子どもが生まれました。

―そこでの生活はいかがでしたか。

満州はほんとに寒いところでね、冬になると鴨緑江が凍るのよ。そこでよくスケートをしました。街には日本人が大勢住んでいて、大和小学校という日本人小学校に通いました。洋風で立派な建物が多い、ハイカラな街だったのよ。ところが……。

―そうですね、１９４１年に太平洋戦争が始まりました。

当時8歳で小学生でした。確か12月8日でしたっけ、ラジオで開戦を知りました。たまたま病気で家にいたのでしょう。子ども

ながらに、大変なことになったと思いました。それからまもなくして、父が日本へ帰ろうと言い出し、翌年の3月ごろ、釜山（ぷさん）経由で帰国しました。帰国後は神奈川県の北鎌倉に住みました。

―帰国後はどんな日々でしたか。

毎日のように上空にB29が来ていました。「警戒警報発令！」「敵機来襲！」とラジオがいうの。「空襲警報発令！」となると、照明のまわりに黒い覆いをかぶせなくちゃならなかったの。明かりが外に漏れないように覆って、下だけ灯るようにしていたわね。

問わず語り型

「由保子」という名前はね、「help by God」=「神によって保たれる子」という意味だと父は言っていました。両親はクリスチャンだったんですよ。

わたしが生まれたのは、満州の安東というところで、いまの北朝鮮と中国との境にある街。朝鮮と満州の間には、鴨緑江という大きな河があってね、父はそこの開発事業の仕事で母と満州へ渡り、わたしを含め7人の子どもをもうけたんです。

冬になると凍る鴨緑江でスケートをしたことをよくおぼえていますよ。満州には日本人がたくさんいて、大和小学校という日本人小学校に通っていました。それでね、満州はとってもハイカラな街で、洋風で立派な建物が多かったのですよ。

そんな日々のなか、1941年の12月8日ですね、家のラジオから米英と戦争（太平洋戦争）が始まったと聞こえてきたの。わたしは8歳で小学生でしたけれど、病気で学校を休んで家にいたのだと思うんです。子どもながらに、大変なことになったと思いましたね。

まもなく父が日本へ帰ろうと言い出して、翌年の1942年の3月ごろに帰国することになったのです。釜山（現・韓国）まで汽車で行って、そこからは船だったと思います。

日本では神奈川県の北鎌倉に住みましたけどね、そのころは毎日のようにB29が上空に来ていて、「警戒警報発令！」「敵機来襲！」とラジオから。「空襲警報発令！」となったら、電気も消さなくちゃならないとされていたので、照明のまわりに黒い覆いをかぶせて、下だけ灯るようにしていましたね。

「図と地」型

上野由保子さんは、1933年に満州の安東という街で生まれた。満州とは1932年から1945年の間、現在の中国東北部に存在した国だ。クリスチャンだった上野さんの両親は、「help by God」=「神によって保たれる子」という願いを込めて、上野さんを「由保子」と名付けた。

朝鮮と満州の間には、鴨緑江という大きな河がある。上野さんの父親は、河川開発事業の仕事で妻と満州へ渡り、そこで7人の子どもをもうけた。

「満州はほんとに寒いところでね、冬になると鴨緑江が凍るのよ。そこでスケートをしていたことをよくおぼえています。日本人がたくさんいて、大和小学校という日本人小学校に通っていました。洋風で立派な建物が多い、とてもハイカラな街だったのよ」

１９４１年の12月８日、当時８歳で小学生だった上野さんは、病気で学校を休んでいたところ、家のラジオで太平洋戦争勃発を知る。

その後まもなく父親の判断により、翌１９４２年の３月ごろに一家で帰国。釜山（現・韓国）まで汽車で行き、そこからは船だった。日本に戻ると、神奈川県の北鎌倉に住まいを得た。

「毎日のように上空にＢ29が来ていました。『警戒警報発令！』、『敵機来襲！』とラジオがいうの。『空襲警報発令！』となると、照明のまわりに黒い覆いをかぶせなくちゃならなかったの。明かりが外に漏れないように覆って、下だけ灯るようにしていたわね」

立花隆ゼミによるインタビュー集『二十歳のころ』（最新版はランダムハウス講談社刊）は、会話型、問わず語り型、「図と地」型の三種類がすべて採用されたインタビュー稿の見本でもある（例えば、会話型は大江健三郎さん、問わず語り型は茨木のり子さん、「図と地」型は水木しげるさん）。適宜、参照してほしい。

インタビュー法の強み

方法論としてとらえたとき、インタビュー法の強みは、その人が実在するという確かなリアリティにつきる。

少数の人（最小値は一人）から何かを聞き出しても、その結果には代表性がなく、一般化できない（大勢の人に一、二の共通質問をして回るインタビューもある）。嘘が含まれるかもしれない。記憶違いがあるかもしれない。そんな批判がインタビュー法にはしばしば向けられる。しかし、これらの批判は当たっているのだろうか。

インタビューの対象となった人物は、誰もがある時代のある社会に生まれ、「いま」を生きている人である。人はみな、その時代や社会の体現者であり、特殊な存在である。一般的な人、平均的な人は存在しない。各人の個別事情の先には、自ずと時代と社会が透けて見える。

インタビュイーは意図せず嘘をつくかもしれない。しかし、この問題は質問紙調査にも、それが自己報告である以上、あてはまる。大事なのは、語られた内容の真偽ではなく、少なくとも本人はそう語っているという事実のほうにある。

インタビューとはインター・ビューである。インタビュアーとインタビュイーのビュー（見方や考え方）のインター（あいだ）に生まれる相互作用、その場限りの現象である。仮に同じ人が同じ人に同じように尋ねたとしても、時と場所が変われば、展開は変わる。その意味からも、インタビューを文字にして残すことは欠かせない。

インタビューを文字にする過程には、結果として追加インタビューが含まれる。そこで相互に、また新たな発見があるかもしれない。インタビューはインタビュー稿が完成するまでと考えたい。そして、できあがったインタビュー稿をインタビュイーに、そして読者に届けよう。インタビュイーは、目前にいるインタビュア

ーを通じて、その先にいる人に向けても話しかけているからだ。

謝辞　インタビューの引用を許可いただいた暮しの手帖社に、この場を借りて感謝したい。

［川浦康至（２０１９）インタビューを書く　コミュニケーション科学、50、１３４－１４０］